

- 14) ファロー四徴症根治術後22年目に、挿管を契機に発症した気管切開後気管狭窄の1手術例

中山 卓・広野 達彦
中沢 聡・大和 靖
建部 祥・伊達 和俊
中川 悟・江口 昭治 (新潟大学第二外科)

症例は35才、女性。12才時にファロー四徴症根治手術を行ない、この際気管切開施行。その後34才時 residual ASD 及び VSD に対する手術を行った。術後呼吸器からの weaning に難渋、第13病日に気管内チューブ抜去。この後、呼吸苦、喀痰排出困難等の症状を残したが軽快退院す。しかし抜管から約10週後呼吸困難増強あり他院入院。気管狭窄の診断にて当科紹介。気管切開部を中心とした全周性の狭窄で、気管々状切除、喘々吻合術を施行した。切除気管壁は肥厚著明であったが、肉芽による狭窄は高度でなく、主に壁の脆弱化による気管虚脱が原因と推測され、stomal site stenosis に長期挿管による cuff site stenosis が加わり発症したと考えられた。本症例に若干の文献的考察を加えて報告した。

- 15) 左動脈管を伴うと思われた大動脈憩室、鏡像的分枝の右側大動脈弓の1例

吉谷 克雄・名村 理
山崎 芳彦・青木英一郎 (新潟市民病院)
桜井 叔史 (第二外科)

症例は3カ月の男児、出生直後より喘鳴を認め、しだいに陥没呼吸となった。食道造影、高圧X線断層撮影で気管分岐部直上での食道の右後方からの圧迫、および約2 cm にわたる気管狭窄を認めた。大動脈造影、DSAで鏡像的分枝をもつ右側大動脈弓であり右側下行大動脈に気管、食道圧迫部に一致した大動脈憩室が認められた。右側開胸で大動脈憩室を切除した。手術所見では大動脈憩室に連なる2本の索状物があり、これは左動脈管と左鎖骨下動脈に連なるものと考えられた。Stewart, Edwards の分類の IB-1 と考えられる稀な症例と言える。

- 17) 急性心筋梗塞による後乳頭筋断裂に対し急性期手術により救命した1例

金沢 宏・春谷 重孝
橋本 恭伸・後藤 智司
倉岡 節夫・大関 一 (立川総合病院心臓)
入沢 敬夫・坂下 勲 (血管外科)
浅川 哲也 (同 循環器内科)

77歳女性。平成4年1月21日午後6時頃胸背部痛で発症。救急外来で左第4肋間にⅢ/Ⅵ収縮期雑音を指摘

された。1月22日呼吸困難が出現し緊急入院した。起坐呼吸状態で湿性ラ音、左第4肋間にⅢ/Ⅵ収縮期雑音を聴取。胸部X線で高度の肺うっ血を認め、心電図では下壁梗塞の所見であった。心エコーは高度の僧帽弁逆流と、僧帽弁前尖とともに移動する輝度の高い乳頭筋像を認め、急性心筋梗塞、乳頭筋断裂による急性僧帽弁閉鎖不全と診断、緊急手術を行った。後乳頭筋の断裂があり、後尖を温存しSJM#25Mを縫着した。術後の冠動脈造影ではNo13が99%狭窄していた。

- 18) 再発性難治性縦隔炎(MRSA)に対する筋肉充填法による1治療例

橋本 恭伸・後藤 智司
倉岡 節夫・大関 一
金沢 宏・春谷 重孝 (立川総合病院心臓)
入沢 敬夫・坂下 勲 (血管外科)
高橋 博和 (同 形成外科)

58才男性。僧帽弁狭窄症に対し平成2年9月17日僧帽弁交連切開術施行。術後MRSA縦隔炎に対し、第43病日両側大胸筋を用いたJeevanandamらの方法による筋肉充填術を施行した。平成3年7月(9カ月目)から再び創上端より排膿があり培養でMRSAを検出した。慢性瘻孔となり保存的治療では改善がみられず、またfistel最深部には、大動脈壁においたpledgetおよび縫合糸が残存していた。平成4年2月3日全麻下に広範囲のdebridement、異物除去およびpectoralis rotation advancement flapを用いた再筋肉充填術を施行することにより完治することができた。

- 19) 肺門部早期肺癌の外科治療成績

滝沢 恒世・寺島 雅範 (県立がんセンター)
小池 輝明 (新潟病院胸部外科)

肺門部早期肺癌切除例58例を検討した。対象症例は亜区域支より中枢の気管支原発で、気管支壁内に限局し、R2a以上のリンパ節郭清で転移なく、気管支断端に癌の遺残のない症例とした。男57例、女1例、平均年齢は66才であった。同時性多発肺門部早期肺癌は1例であった。組織型は扁平上皮癌が56例、腺癌が2例で、切除術式は肺摘除2例、肺葉切除55例、区域切除1例であった。術後生存率は3年生存率87%、5年生存率80%、10年生存率57%であった。死亡11例中癌再発が1例、異時性第2肺癌が5例、他臓器癌が2例、他疾患が2例、不明が1例で、第2肺癌の発生率が高く、第1癌の術後厳重な経過観察が必要とおもわれた。